

# 日本人フランス語学習者のための 「学習支援ライブラリー」 ——ヨーロッパ言語共通参照枠に基づくプロジェクトの 日本の大学への導入に向けて——

ヤニック・ドゥプラド

武井由紀

## 0. はじめに

「学習支援ライブラリー (Bibliothèque de l'apprenant)」<sup>1</sup>とは、ナタリー・ルロン (Nathalie Lelong) とアラン・デュラン (Alain Durand) によって考案、開発され、設置の実現に至ったプロジェクトのことである。彼らは共にマドリードのアンスティチュ・フランセの教育顧問であり、司書でもある。このプロジェクト内容を簡潔に述べるとすれば、全てのフランス語学習者のために、教科書等の教育資料を除いたあらゆる書籍や視聴覚資料をレベルに応じて分類し、学習支援を試みる、というものである。従ってプロジェクト名に含まれてはいないが、この「学習支援ライブラリー」は「フランス語学習者」を前提として立ち上げられたものである。2005年以降、彼らのプロジェクトについては世界中の外国語としてのフランス語教育に携わる様々な関係者によって議論や分析が重ねられてきた。その結果、ルロンとデュランの業績は評価され、以後、オスローや東京、ニューヨークなど、アリアンス・フランセーズやアンスティチュ・フランセの数多くの機関で「学習支援ライブラリー」が次々と設置されていった。

本学のフランス語学科においても「学習支援ライブラリー」を設置することとなり、適切かつ有益な資料室を設けるには、どのような変更や修正を施し、何が考察できるかを検討するきっかけとなった。そこで本稿ではまず1.において、学習者にとって気軽に利用できる資料室というものをル

ロンとデュラン、つまり二人の創設者が考え直すことになった観察点とその結果について示しつつ、「学習支援ライブラリー」とは何かを述べる。また、創設者が考える教育効果と共に、「学習支援ライブラリー」の特徴や問題点についても述べる。

続く2.では資料を分類するための二種類の分類基準表を取り上げる。この分類基準表は、CECR<sup>2</sup>によって提唱された枠組みに適応させながら、習得レベルに応じて資料を各レベルに位置づけることが可能なものであるが、プロジェクトの考案当時、「この「学習支援ライブラリー」は言語教育分野における最新知識に適応するべきものであった」*« Cette Bibliothèque de l'Apprenant (...) devait s'adapter aux connaissances actuelles en pédagogie des langues »*<sup>3</sup>との創設者の考えから、このプロジェクトで彼らがCECRを意識的に取り入れたことが分かる。本稿では日本語に翻訳した分類基準表を示すが、フランス語による原表も参考資料として最後に掲載する。

以上を踏まえた上で、3.にて日本の大学の特徴を考慮した分類基準表を考察する手がかりを検討していく。これは日本の大学環境が、「学習支援ライブラリー」プロジェクトが誕生した環境とは大きく異なるためである。例えば、日本の大学では学習者の年齢は一般的に18歳から22歳であり、学習者の母語である日本語はフランス語とはかなり異なる。このような日本人フランス語学習者に対してどのように分類基準表を適用させるのか、また、アリアンス・フランセーズの各機関が用いている教育方針<sup>4</sup>と大学における教育方針とを区別できるのかどうか、といったことが疑問点として考えられる。

しかし本題に入る前に、日本におけるヨーロッパ言語共通参照枠、つまりCECRの受容の流れを少なからず概観しておきたい。なぜなら、それが本稿の意義と本稿の位置付けの理解を助けるものだと考えるからである。周知の通り、2001年にCECRが刊行されて以来、ヨーロッパ言語はもとより実に様々な言語にこのCECRは翻訳され、2004年には日本語版も出版され<sup>5</sup>、今日に至るまで特に言語教育の分野では大きな関心と共に議論の的と

なっている。CECRの日本での「受容はおおよそ3種類に類型化できる」<sup>6</sup>という西山(2010)の分析を要約すれば次のようになる。第一はCECR誕生の背景や経緯を検討することなく単なる紹介に留まる類、第二はCECRの言語理念を顧みることなく時代の流れに便乗してCECRの基準を無批判的に適用するもの。そして第三はCECRの着想を利用して日本独自の言語共通参照枠を作成しようとするもので、一定の評価に値するものの、CECRが掲げる複言語・複文化主義という言語教育思想が欠如していると考えられるものである。

以上を考慮すると、本稿は、CECRに基づいて開発・設置された「学習支援ライブラリー」を根底にある言語理念を崩すことなく日本の大学における教育環境を考慮した上で、多少なりともその設置を支える分類基準表を批判的に検証し、日本の大学にいかにより有効的に導入すべきかを検討しつつ一定の提案を試みるものであり、本稿の意義と既存の関連研究との位置付けは明らかであると思われる。

本稿は、筆者の知る限り「学習支援ライブラリー」のコンセプト自体、初めて日本語で詳しく述べるものであり、このような日本語化によって、日本でフランス語教育に携わる多くの関係者の方々に、フランス語習得に大きな利益をもたらすと考えられる、この一つのツールとしての「学習支援ライブラリー」の教育効果や分類基準表について考えていただくきっかけとなることを願うものである。もちろん、これがフランス語教育に限られることなく、他言語を目標言語とする外国語教育界においても影響を与え、相乗効果が生み出されることを願っている。

## 1. 一般的な資料室やメディアライブラリーと「学習支援ライブラリー」との違い

### 1.1. 限られた利用実態の問題

ルロンとデュランがこの新しいタイプの「学習支援ライブラリー」を設

立するに至った理由の一つに、マドリードのアンステイチュ・フランセにおける、学習者による資料リソースの限られた利用状況が挙げられる。学生にとっては大抵が外国語としてのフランス語教本の閲覧・貸出や、主にフランス語の文法の練習問題集や、教員の指導のもとにクラスで通常利用される副教材に限られてはいるものの、一般的な資料室やメディアライブラリーというものは、学習者が教育資料以外のものも利用できる、特権を与えられた資料室として考えられるべきものである。しかし実際は、「学習者は教育的あるいは視聴覚教材以外の資料は貸借せず、結局のところ、一般的な資料室やメディアライブラリーを利用可能な文化的ツールとして捉えていないのである」*« des élèves (...) n'empruntaient pas de documents autres que pédagogiques ou audiovisuels (...), et donc ne considéraient pas cette Médiathèque comme un outil culturel accessible »*<sup>7</sup>。その理由には、「一定の言語習得レベルに到達するまで、学習者は全体的な内容を把握するのに必要な能力を兼ね備えていないと感じている」*« jusqu'à un certain niveau d'acquisition de la langue, ils ont le sentiment de ne pas avoir les capacités nécessaires pour accéder au fonds général. »*ことが挙げられ、「自立性の欠如から、学習者は限られた利用者の立場のままになってしまうのである」*« par manque d'autonomie, ils sont maintenus à un statut de sous-utilisateurs. »*<sup>8</sup>が、この傾向は日本でも十分観察される。

このような捉え方を起点として「資料を識別し、習得レベルによって資料を提示する方法について考察」*« réflexion sur la manière d'identifier les documents (...) et de les présenter par niveaux d'apprentissage »*<sup>9</sup>したことが、ルロンとデュランにとって、習得と発見を可能とするような資料室、というアイデアを考えるきっかけとなったのである。

## 1.2. どのような資料を提供するのか

教育資料を考慮に入れないことがいくら難しく、まして不可能であるとしても、教員の指導が必要な文献と、自己学習で利用可能な文献、つまり

学習者が学習意欲を損なうことなく最大限活用できるような解答や簡潔明瞭な説明、あるいは十分な理解をたすける手ほどきが付属した文献とを区別することは重要である。今日、大多数の教育資料はCECRの基準に従って分類されているが、外国語としてのフランス語教育の出版業界では、CECRが全面的な影響を与える前に出版された教育資料がまだ多くあり、そこでは教師のレベル判断や指導が大抵必要となる「初級 *débutant*」「中級 *intermédiaire*」「上級 *avancé*」といった曖昧な用語が用いられている。これが、ルロンとデュランが「学習支援ライブラリー」に「教室での学習に適した資料」*« les ouvrages à destination d'un apprentissage collectif »*<sup>10</sup>を組み入れないことを奨励している理由である。

従って彼らが創設した「学習支援ライブラリー」は、次の二種類の資料タイプによって成り立っている。

…学習者が独自で利用できる資料

…文学、ドキュメンタリー文学作品、歌、映画、特定された文化的内容を提供するその他全ての資料を含む、「文化的資料」*« produits culturels »*<sup>11</sup>

### 1.3. どのような言語教育の枠組みで捉えるのか

創設者であるルロンとデュランの「公準は、すべての資料が一つのまとまった評価基準というふるいにかけて評価が可能な難易度レベルを兼ね備えているべきだという考えに基づいている」*« notre postulat s'appuie sur l'idée que tout document possède un niveau de difficulté possible à évaluer au crible d'un ensemble de critères »*<sup>12</sup>。彼らはそれ故、DVDやその他あらゆる種類の視聴覚資料と同様、「印刷された」資料も分類することが可能な二種類の評価基準を規定した。そして彼らにとって妥当な基準表を作成するため、彼らはこのプロジェクトを、2005年当時、まだ初期段階にあったCECRによる言語教育の枠組みの中に組み込んだのである。CECRによってなされた提言やその後の進展については、既に数多くの研究論文や関連書籍が出て

いるため、本稿では詳しく取り上げることはしない。しかしながら、ルロンとデュランの論文で明記されているように、「この(CECRの)教育方法は、『行動における』言語使用を前面に打ち出していて、(…)CECRが定める習得レベルや教育目標は、特にそのような言語の実践的使用に関わるA1、A2、B1のレベルに密接に関係したものである」« ce mode d'enseignement (le CECR) met en avant l'usage de la langue en action. (...) La progression, les niveaux d'acquisition que le *Cadre* détermine sont donc, surtout pour les trois premiers niveaux, liés à cet usage pragmatique de la langue »<sup>13</sup> ことは特筆に値するだろう。

ではルロンとデュランはどのような方法で「学習支援ライブラリー」にこの新しい言語習得の指針を取り入れ、また、どのようなことを限界として見出したのだろうか。第一の強調すべき重要な点はB2レベルに関するものであるが、B2とはこのレベルを超えると学習者はもう十分な知識を身に付けているため、ほとんどの資料リソースを自由に利用できると考えられているレベルである。そうである以上、「学習支援ライブラリー」はA1からB2までのレベルに対しては、その価値があるものだと考えられる。ルロンとデュランはまた、CECRの指針自体についても、外国語としてのフランス語教育の非専門家にとっては、その記述内容を理解することの難しさについて強調している。「CECRが必要不可欠なものだとしても、それが常に容易に参照できるツールであるというわけではない。各レベルで求められるフランス語の能力を説明する表の中の単純な表現でも、予備知識が必要であることが認められる」« Si le *Cadre* est un outil indispensable, ce n'est pas toujours un instrument de consultation facile. Nous avons vu que les formulations pourtant simples des tableaux descriptifs cachent souvent un savoir qu'il faut avoir acquis au préalable »<sup>14</sup>。このように、ルロンとデュランは口頭表現(CDやDVD)や読解能力(本、読まれた資料が加わった出版物)の資料に着目しながら、聞くことと読むことに重点を置くことを提言している。

彼らは論文の中で、次の、フランス語教育において一般的に利用されている学習時間数を取り入れた表を引用している。

ヨーロッパ共通参照枠のレベル	各レベルに必要とされる学習時間	各レベルでの累積学習時間数
A1	60から100時間	60から100時間
A2	+ 100から120時間	160から220時間
B1	+ 200時間	360から420時間
B2	+ 200から250時間	560から670時間
C1	+ 250から300時間	810から970時間
C2	+250時間(これ以上のブラッシュアップは学習者次第である)	1060から1220時間

彼らは学習者のレベルや学習環境によって変動の恐れがある本表について、幾つかの指摘をしている。言語学的系統が異なること（地理言語学的な隔たり）はとても重要な点であり、スペイン人学習者にとっては、日本語を学ぶよりもフランス語を学ぶ方が非常に容易いことは明白である。言語習得が行われる環境も大事な点であると認識されている。実際、学習者や学習支援ライブラリーが設置される機関によって、配慮すべき資料レベルというのは異なるものである。従って、「この「学習支援ライブラリー」の実現には、要するに、一つは各レベルの教育に必要な量、もう一つはレベルごとの登録学生者数という、二つの事実を考慮しなければならないのである」*« La politique doit en somme tenir compte de deux réalités : le volume nécessaire à l'enseignement de chaque niveau et le volume d'étudiants inscrits par niveau »*<sup>15</sup>。

「学習支援ライブラリー」プロジェクトは、CECRの枠組みに適応させるだけでは十分な効果は得られないと考えられている。記述内容を読めば、CECRはかなり限られた方法でしか「本の世界 *monde du livre*<sup>16</sup>」を利用する機会が認められていないことが分かる。そこで、教育資料を別とした、資料選定のための言語学的でも実践的でもない、別の基準の重要性を

ルロンとデュランは強調しているのである。「CECRは、教育的でない資料の選定という面では一見したところかなり無意味なものに映るものだ」  
« *Le Cadre paraît a priori assez inutile pour notre classification de documents non pédagogiques* »<sup>17</sup>。

#### 1.4. どのような基準が選定のために必要か

ルロンとデュランは、文化的な要素は理解を容易にさせ、また学習者を動機づける、という二つの仮説を発展させた文化的なアプローチを加えながら、CECRで課されている厳しい規制を遠ざけている。「文化的アプローチはB2レベルより下のレベルに位置づけられる資料を特に提供することを可能とするものである。これはCECRの記述対象から完全に外れてしまった要素を考慮しているからであるが、そうした要素というものは、メディアライブラリーのあらゆる利用者側にとって、非教育的な資料というアプローチから成るものの中で否定し難い価値を有しているものだと考えられるのである。」  
« *une approche (...) culturelle (...) permet en particulier de proposer des documents à des niveaux se plaçant en dessous de B2, grâce à la prise en compte d'éléments échappant strictement aux descripteurs du Cadre, mais ayant à notre avis une valeur indéniable dans ce qui constitue l'approche d'un document non-pédagogique de la part de tout utilisateur d'une médiathèque* »<sup>18</sup>。

マドリードのアンスティチュ・フランセの教育チームと司書の間で交わされた数知れない意見交換や調査の成果によって分類基準表が出来上がったわけだが、明確な考察軸を考慮に入れたひとまとまりの基準群を作り上げていかなければならず、構成上の基準、言語的基準、文化的基準、抽象的基準という四つの基準群が設けられた。表の中で確認できる一連の「任意的な」基準はこれら四つの基本的なグループに加えられたものである。

それぞれの基準には、分析された資料レベルに応じて点数が与えられている。ひとたびその資料が評価基準のふるいにかけてられると、総合的な評定点が与えられ、それが資料の分類を定めることとなる。

80点以下	A1 レベル
85から110点	A2 レベル
115から160点	B1 レベル
165から200点	B2 レベル

200点を上回る資料は「学習支援ライブラリー」には設置されない。

構成上の基準とは、ページ数、文章の区切り(章の数、段落の長さ)、印刷方法(行間の広い、あるいは狭い表示)、それに資料内に示されているイラストの価値(それが説明的であるか、単に装飾的であるか)というように、「見た目で読み手が読者自身に適用する選択の制限を決定づけるものである」*« Les critères éditoriaux (...) conjuguent les restrictions de choix qu'un lecteur s'applique à lui-même de facto »*<sup>19</sup>。言語的基準について言えば、構文(短いあるいは長い文、単純あるいは複雑な文型)、語彙(標準的、高尚な、あるいはくだけた表現など、言語使用域のタイプ)、それに動詞の時制など、資料内に現れる語彙と同様、形態的、統語的構造に関するものである。文化的基準については、例えば万人によって共有されている文化的要素を資料が提示しているか、それとも特定の分野についての資料であるかなど、「文化的基準とは、資料の受容を助けるか、妨げるものことである」*« Les critères culturels (...) peuvent faciliter ou faire obstacle à la réception d'un document »*<sup>20</sup>。抽象的基準については、これも資料の選定においては非常に重要なものであり、多かれ少なかれCECRによって定められた教育目標に従っているが、A1レベルは学習者がより抽象的なテーマに少しずつ取り組んでいけるよう、最小限の日常生活で用いる表現や語彙に限られている。

「任意の基準は排他的なものではない」*« critères facultatifs ne sont pas exclusifs »*<sup>21</sup>。これは主に、内容への関心度、語彙集や用語解、あるいは内容理解のための補足的な問題が備わっているかなど、資料に算出された合計点から、より細かな方法で分類することが可能な点数を差し引く働きをしているものである。

## 2. 基準表

ここでは実際に資料を分類するための二種類の分類基準表を取り上げるが、留意すべき点がある。2.1.と2.2.は原表（本稿の最後に掲載）を日本語に翻訳したものであり、本稿で取り立てて述べる部分には「\*」印を、また補足説明が必要な箇所には連番の注を付しているが、いずれも原表にはないものである。

### 2.1. 印刷物の分類基準表

基準	点数	内容	備考
ページ数 (小説集の場合、物語ごとの平均ページ数を考慮する)	5	20ページ以下	
	10	20から40ページ	
	15	40から100ページ	
	25	100ページ以上	
	40	170ページ以上	
活字・印刷	5	大きな活字で、とても読みやすいフォント	
	10	中程度の活字で、普通に読めるフォント。全体として行間が広い	
	20	全体的に小さな活字で、行間が狭い	
“説明的な”イラスト	5	規則的に付いている（一つの文章に付きイラスト一つ）	
	10	ドキュメンタリーの場合に、本文が扱い得る技術的あるいは専門的側面を画像で説明している	
	15	フィクションの場合に、反復的ではあるが非規則的にイラストが現れる	
	20	全くイラストがない	
文章の区切り			
章ごとの区切り	5	1から3ページ	
	10	4から10ページ	
	15	10ページ以上	

段落ごとの区切り	0	1ページに1から3文(最大5行)	
	5	大半が10行までの小段落	
	10	大半の段落が10から20行	
	15	大半が長い段落(25行以上)	
構文	10	短く、構文的に簡単な文(主語、動詞、補語)	
	15	かなり短い文(1から2行)で、従属節がないか、わずかにあるだけ	
	20	従属節を用いたより長い文が反復的に現れる	
	30	大半は長くて複雑な文	
語彙	5	言語が類似しているため、意味を認識するのが簡単で容易な言葉。日常生活の行動に関係した語彙。	
	10	標準的で日常的なフランス語。比喻やくだけた表現、専門的な表現がとても少ない	
	20	比喻やくだけた表現、専門的な表現、あるいは高尚な表現が一時的に、しかし非規則的に現れるが、文の理解を妨げはしない	
	40	くだけた表現、比喻的、俗語的、専門的な表現や、高尚な表現が頻繁に現れる	
	対象外	くだけた表現、比喻的、俗語的、専門的な表現や、高尚な表現が規則的に現れる(一段落に数多い)	
動詞の時制*	5	すべての文が現在形。複合過去形がわずかに現れる	
	10	文の大半が現在形、複合過去形、半過去形、あるいは単純未来形で現れる	
	20	全ての時制と叙法が混在する	
社会文化的、および文化的知識	5	双方の文化 <sup>22</sup> に共通し、非常に一般的な文化的、歴史的、地理的な知識	
	10	同じ表現で表されるもの、有名な人物、あるいは非常に有名な歴史的知識(ジャンヌダルク、第二次世界大戦)など、国際的な、容易に理解できる範囲の知識	

	15	あまり知られていない地理的、政治的、歴史的、文化的知識だが、文章の全体的な理解を妨げはしない。また、読み手がある分野に詳しくなれるように、あまり知られていない事実を読み手に説明するドキュメンタリー作品（インカ文明、航空機の歴史など）	
	35	“より詳しい” 政治的、歴史的、文化的知識で、その理解が文章の全体的な理解に必要である	
抽象性の度合い	5	日常生活に主として関係した具体的な文脈	
	15	日常生活から外れた具体的な文脈。意見や感情表現が時々現れる。出来事や考えが単純につながっている	
	30	抽象性や裏の意味を持ったもの（ユーモア、皮肉）や議論が、規則的ではないが反復的に出現する	
	50	抽象性（理論的、哲学的な考察など）や裏の意味をもったもの（ユーモア、皮肉）が規則的に出現する。出来事や考えが複雑につながっている	
任意の基準	-10	用語解、語彙集、語彙注釈、インデックス、または容易く利用できるたくさんの練習問題がついている場合、10点省く	
	-10	物語が感動的なストーリーである場合や、大半の利用者の興味をひくような一般的なテーマである場合、10点省く	
	-10	翻訳物の場合や、学習者の居住国で一定の評判を得ている著者の場合、10点省く	
	-20	質の良い音声副教材が添付されている場合、20点省く	
		<b>Total 合計</b>	
80点以下		A1	
85点から110点		A2	
115点から160点		B1	
165点から200点		B2	

## 2.2. ビデオ・DVD（資料）の分類基準表

基準	点数	内容	備考
字幕	5	スペイン語 <sup>23</sup> の字幕付き	
	20	フランス語の字幕付き	
	40	字幕なし	
資料の所要時間	5	30分以内	
	10	30分から90分	
	20	90分以上	
音質	5	雑音がなくはっきりと聞き取れる	
	10	雑音が多少ある	
	20	雑音が多い	
言語使用域	10	標準的(RFI <sup>24</sup> のような)、日常的なフランス語。比喻やくだけた表現、専門的な表現はほとんど使用されていない	
	20	比喻やくだけた表現、専門的な表現、あるいは高尚な表現（文を長くする傾向）が時折、不規則的に現れるが、理解の妨げはしない	
	40	比喻やくだけた表現、専門的な表現、あるいは俗語的、専門的、高尚な表現が頻繁に現れる	
	対象外	対話や解説・コメントの全体がくだけた表現、俗語的、専門的、あるいは高尚な言語使用域上で構成されている	
リズムと発音	10	出演者や話者がゆっくりと、特にはっきりとした話し方で述べている（多くのドキュメンタリー映画の場合がそうである）。声は他の音源によってほとんど重なることはない（音楽、街頭シーン、など）	
	20	出演者や話者はより自然で自発的な話し方で述べ、時折、理解が不明瞭となる。理解は音響的な環境によって難しいものとなり得る。	

	40	早い口調。言葉の理解はかなり困難で、音響的な環境、声の大きさ、発音の悪さ、あるいは強いアクセントのために聞き取れない	
社会文化的、および文化的知識	5	二国間 <sup>25</sup> に共通する知識	
	10	より詳しい側面についての知識であるが、その知識は理解には必要でない	
	30	かなり見当がつきにくく、あまり知られていない文化的な知識。その知識は資料の内容をつかむためには重要というより、むしろ必要である	
映像とナレーションの関係	5	映像とナレーションの間に直接的な関係がある（多くのドキュメンタリーの場合）。作品は主としてジェスチャーに基づく。映像だけで意味を十分理解できる	
	20	ジェスチャーだけでは意味が理解できない。ストーリーや内容が進むための会話のシーン（対話、独話、背景に聞こえる解説）が繰り返し現れるが、こうした中身を説明する映像がない	
	40	ナレーションがほとんど唯一の意味を理解するためのものである。シナリオは入り組んでいて、大抵想像しにくい状況を表している	
任意の基準	-10	有名な作品や人気のある作品など	
		<b>Total 合計</b>	
75点以下		<b>A1</b>	
75点から90点		<b>A2</b>	
95点から125点		<b>B1</b>	
130点から170点		<b>B2</b>	

(注：A1・A2のレベルには学習者母語の字幕付きの作品だけを認めることにした)

### 3. 日本の大学で実践するためにどのような修正をなすべきか？

「学習支援ライブラリー」に関する最初の公表以来8年が経過し、ようやく世界中のアンスティチュ・フランセやアリアンス・フランセーズで「学習支援ライブラリー」が設置された。数か月前から東京のアンスティチュ・フランセにおいてもこの実用的で新しい「学習支援ライブラリー」が配備されている。

しかしながら、このプロジェクトの創始者らによって改善され、守られてきた分類基準は、世界中のアンスティチュ・フランセやアリアンス・フランセーズに関連した機関以外では、これまで議論的にされることも、疑問視されることもなかったように思われる。だからといって本稿で、フランス語学習者の大多数の要望に十分応える能力が備わっていると考えられる、分類基準表を全面的に修正しようなどと考えている訳ではない。しかし、本学のフランス語学習者と本学における教育に、この素晴らしい外国語学習としての一つのツールである「学習支援ライブラリー」をより密接にかかわらせるためには、純粋な適用が難しいと思われる問題点を指摘すること、またそのための修正点を提案することは少なからず価値あるものではないかと考えられる。

本学のフランス語学科には、主に4年間フランス語を専攻語学として学ぶ学生を中心として、学科には20歳前後の合計数百人の学生が在籍している。その内の多くの学生が半年から1年間、ボルドー、リヨン、グルノーブル、ブリュッセル、モントリオールにある提携大学にフランス語を学びに行くか、行った経験を有する。

こうした学生が帰国した後、最も良い場合で最大B1レベルを期待することができる。そのため、まずB2レベルの資料を最小限にとどめて「学習支援ライブラリー」を見直すこととした。また、大学教育課程の最初の二年間で、A2レベルまでの資料に学習者に興味を抱かせることができると考えている。従って、1年生と2年生に在籍する学生数が多いことを考慮すると、それだけA1レベルの資料が必要であるにもかかわらず、実際

の資料数が少ないため、A1レベルとA2レベル、そして本学の学生に最も有益となるような資料リソースを最大限拡大することが検討課題として挙げられる。例えばこれまでに、A1以外のレベルに対しては、分類基準表はむしろ上手く適合しているようであるが、主としてA1レベルに関するものが問題視されていることは明らかである。それに加え、本学における特に1年次の教育進度や習得レベルを考慮すると、A1レベルは既にレベルの高い内容であると考えられるため、A1レベルに分類され得る資料の最高点を考え直すことが妥当ではないかと思われる。そこで具体的な解決策として、元々の分類基準表では最高点として80点が定められているところを、70点、ないしは65点まで下げる<sup>26</sup>ことで対応できるのではないかと考えられる。

日本の大学では、アンスティチュ・フランセ等の機関とは異なり、外国語としてのフランス語教育の教授法にしばられることはほとんどない。本学のフランス語学科では二つの教育方針が展開される共存状況にある。フランス語のネイティブ教員は、とは言え、担当科目によっては数人の日本人教員も同じ目標を掲げる授業を行っているが、FLE、つまり外国語としてのフランス語教育に全面的に向かった教授法を実践する傾向にある。それに対し日本人フランス語教員は、一般的にネイティブ教員の教授法とは異なる目標で授業を行っている。実際、ネイティブ教員によって行われているコミュニケーション重視の教授法と、日本人教員による文法や読解を重視した教授法に仏検などの検定試験を考慮した教育目標も取り込んだ教授法、という二つの教授法が同時進行している。このような実践的および組織的な二つの教育方針がどのような点で「学習支援ライブラリー」へのアクセスを妨げることになるかを見出そうと試みた。

例えば、FLEの教育では、読解部分において全体的な理解を重視するアプローチを採用しているが、このアプローチを日本人フランス語学習者に用いることは非常に困難である。というのも日本人フランス語学習者にとって読解上の気がかりの中心は、文の文法的小および構文的な機能である

ため、言語のおよび文法的な理解が大抵の場合意味に勝ってしまい、読む楽しみや物語の価値を付随的なものへと遠ざけてしまうことが経験値から認められるからである。従って、まず取り組むべきことは、言語の機能的な仕組みを常に学生が疑問視しないように慣れさせることであり、読むことで得られる愉しみをむしろ見出せるように導くことであろう。

この第一の実践的かつ理論的な問題点と密接に関係したことはあるが、二つの教授陣によって並行して行われている動詞の時制の導入方法や時期について述べる必要がある。日本人教員のプログラムでは、時制の導入とその理論的および構文的な説明や習得リズムはとても早く、接続法も1年生から導入されている<sup>27</sup>のに対し、ネイティブ教員のプログラムにおいては1年生を複合過去で終える。このように文法的な解説が先立つ場合、たとえ学習者がある活用形と用法を理解していると考えられるとしても、学習者が十分に直説法現在形を使いこなせるレベルや状況にあるとはなかなか言い切れず、実用面においては十分な習得レベルに達しているとは限らない。実は命令法と丁寧さを表す条件法についても同様のことが言える。日本の大学においてしばしば見られるこのような状況を鑑みると、「学習支援ライブラリー」の資料分類基準にある「動詞の時制」という基準項目（表の\*印参照）をどのように判断すべきか検討しなければならないだろう。ネイティブ教員のプログラムを主体に考えて、例えば表に基づき、A1・A2レベルに該当しそうな5点の判断にとどめるべきなのだろうか。それとも、実際の学習者レベルはA1あるいはA2であるが、10点が得られる次のレベルにまで引き上げて判断すべき、あるいはそう判断できるものなのだろうか。このような問題点は、「学習支援ライブラリー」の枠組みの中で、時制については、CECRで定められている進度を厳密に守るべきなのだろうかという疑問につながる。

本来、スペインでこの「学習支援ライブラリー」の設置が可能となった背景を思い起こすと、言語の類似性の問題がまず頭に浮かぶ。ところが、日本の教育環境では、義務教育で長期的な英語教育がなされていてもフラン

ス語と英語の言語間の共通点に気付くとは限らない。この言語間の類似性が着目され難い理由には次の二点が挙げられるのではないだろうか。一つは二つの言語、つまりフランス語と日本語の間に構文的、意味的、音声的側面等、多くのレベルにおいて距離があることである。もう一つは、言語の表記体系の違いに加え、表音文字と表意文字という違いによるものである。例えば、外来語をカタカナで表記する場合を考えると、本来の音声とのつながりが見えにくくなる。その上、表音文字であれば部分的に意味的単位が視覚的に存在していたものが、カタカナになるとそうした手がかりが全くなくなってしまう。元々の分類基準表のバランスを崩すことなくこうした問題点にまつわる基準を取り入れる方法を考えなければならない。

また、内容の問題も不可避である。なぜならフランスの成人年齢は18歳だが日本では20歳である。例えば、映画に登場する薬物や暴力、セックスやヌードというものは、フランスのテレビや映画の中では構成要素の一部を成すため、当たり障りのないテーマだと思われるものでも、それが生々しく描かれると、本学の「学習支援ライブラリー」では対象外のものとして扱われることになる。つまり、本学で課す制限は文化的というより道徳的なものであるが、その方が日本の教育環境には適しているように思われる。

実際の設置についても強調すべき、重要な問題がある。「学習支援ライブラリー」について調べている内に、既に「学習支援ライブラリー」が設置されている多くの機関では司書が常時配置され、FLEを専門とする教員と共同で「学習支援ライブラリー」を運営していることが分かったのである。もちろん本学では「学習支援ライブラリー」で学生を支援するために教員が常駐するような環境を学生に提供することはできない。そこで、学生にとって適切な資料検索の妨げとなり得るような、学生だけがそこにいるという状況を生み出さないよう、大半の講義が終わる夕方に交代制で常駐教員を配備することとした。この交代制は、「学習支援ライブラリー」に教員チームを動員するということと、学生にこの「学習支援ライブラリー」に

興味を抱かせ、教養を身に付ける機会を与えること、という二重の利点を持つことになる。

更に、これまでに直面した二つ目の問題点は、資料選定についての情報共有が欠如していることに関連しているといっても過言ではない。世界的に見てもかなり多くの機関が「学習支援ライブラリー」を設置したにもかかわらず、実際に分類されて一覧になったものを手に入れることは非常に困難である。どのような資料が学生のニーズに合っているのか、あるいはどのようなものがそうでないかが分かれば教員や設置を考えている機関にとって役立つはずである。少なくとも、資料を何度も分類基準表に照らし合わせて判断する必要性は必ずしもないのだから、それが分かれば膨大な時間の短縮につながり、また入手すべき資料を選定する作業も大いに簡素化されるはずである。手元に資料がない状態で、つまり内容を判断できないまま資料を購入して配置することは、運営側にとっては物理的にも経済的にも負担がかかるものであることは明らかである。

#### 4. 結論

「学習支援ライブラリー」はマドリードで創設されて以来、長年にわたって改善されてきたもので、文化的および言語学的な関心を学生に抱かせるためには避けて通ることのできない言語習得上のツールであり、またこれを本学で設置したいと強く望んでいる。しかし、本学で効果的に「学習支援ライブラリー」を設置することについては、幾つかの問題点が残されていることを指摘してきた。例えば、A1レベルの資料を見つけることはかなり難しい。A1の表は、母語がフランス語に近いスペイン語圏のフランス語学習者にとってさえ、かなり要求の高い、難しい資料であることを示している。従って、母語がフランス語とは随分異なる学習者には更に難易度の高いものとなるのである。

本学の教育方針では、受け入れる学生の大半は「完全な初学者」であり、1年生から2年生の初めでA1からA2レベルに達し、その後一般的には卒業

までにB1レベルを習得していく。A1とA2レベルに見合う資料を見つけて設置することは、本学のような大学という環境において「学習支援ライブラリー」の設置を望む場合、まさに積極的な挑戦であると言える。

また、現時点で確認できる問題点は、「学習支援ライブラリー」を設置した機関からの情報提供が不足していることであり、入手および利用が可能な資料リストや参考資料がほとんど無く、この「学習支援ライブラリー」に割かれたインターネットサイト上で情報交換があまり行われていないことも、残念ながら、多くの者にとって、「学習支援ライブラリー」が単なる一つの道具としてしか映っていないことの理由であるように思えてならない。そこで情報公開という点に配慮し、本学独自の「学習支援ライブラリー」の開設に向けては、これまでに述べた問題点や提案に加え、この「学習支援ライブラリー」に対する教員および学生のフィードバックと共に、本学の学生に提供する資料を分類したリストを、最初の段階から公開する予定である。

### Grille des critères de classement des documents imprimés

Critères	Points	Définitions	Note
<b>Nbre de pages</b> (pour les recueils de nouvelles, considérer le nbre de pages moyen par récit)	5	Moins d'une vingtaine de pages.	--
	10	De 20 à 40 pages.	
	15	De 41 à 100 pages.	
	25	Plus de 100 pages.	
	40	Plus de 170 pages.	
<b>Typographie</b>	5	Gros caractères, police très lisible (type livres pour enfants).	--
	10	Caractères moyens, police lisible. Ensemble "aéré".	
	20	Texte intégralement en petits caractères et très peu "aéré".	
<b>Illustrations "explicatives"</b>	5	Systématiques (un texte = une illustration).	--
	10	Dans le cas des documentaires, explication en image des aspects techniques ou spécialisés que peut aborder le texte.	
	15	Dans le cas des fictions, présence récurrente mais non systématique des illustrations.	
	20	Aucune illustration.	
<b>Découpage du texte</b>			
<b>Découpage par chapitres</b>	5	De 1 à 3 pages.	--
	10	De 4 à 10 pages.	
	15	Plus de 10 pages.	
<b>Découpage par paragraphes</b>	0	Une à trois phrases (5 lignes maximum) par page.	--
	5	Majorité de petits paragraphes, jusqu'à 10 lignes.	
	10	Majorité de paragraphes entre 10 et 20 lignes.	
	15	Majorité de longs paragraphes (plus de 25 lignes).	

<b>Syntaxe</b>	<b>10</b>	Phrases courtes et syntaxiquement simples (sujet, verbe, complément).	--
	<b>15</b>	Phrases assez courtes (1 à 2 lignes), pas ou peu de subordonnées.	
	<b>20</b>	Apparition récurrente de phrases plus longues (jusqu'à 4 ou 5 lignes), avec plusieurs subordonnées.	
	<b>30</b>	En grande majorité les phrases sont longues et complexes.	
<b>Vocabulaire</b>	<b>5</b>	Mots simples et faciles à reconnaître du fait de la transparence de la langue et/ou vocabulaire relatif aux actions familières de la vie quotidienne.	--
	<b>10</b>	Français standard (pas d'expressions imagées, argotiques ou soutenues), courant: très peu d'expressions imagées, familières ou techniques.	
	<b>20</b>	Présence ponctuelle mais non systématique d'expressions familières, imagées, techniques ou d'un registre soutenu, n'entravant pas cependant la compréhension du texte.	
	<b>40</b>	Présence fréquente (plusieurs par page) d'expressions familières, imagées, argotiques, techniques ou d'un registre soutenu.	
	<b>Doc éliminé</b>	Présence systématique (plusieurs par paragraphe) d'expressions familières, imagées, argotiques, techniques ou d'un registre soutenu.	
<b>Temps verbaux</b>	<b>5</b>	Essentiel du texte au présent. Brèves apparitions du passé composé.	--
	<b>10</b>	L'essentiel du texte est au présent, au passé composé, à l'imparfait et/ou au futur.	
	<b>20</b>	Présence des différents temps et modes.	

<b>Références socioculturelles et culturelles</b>	<b>5</b>	Références socioculturelles très simples relatives à des actions familières communes aux deux cultures.	--
	<b>10</b>	Références culturelles de portée internationale et aisément identifiables : homonymie, notoriété, quelques références historiques très célèbres (Jeanne d'arc, la 2 <sup>de</sup> guerre mondiale, etc.)	
	<b>15</b>	Références géographiques, politiques, historiques et culturelles peu connues. Cependant elles n'entravent pas la compréhension globale du texte. Également livres documentaires expliquant au lecteur des réalités peu connues afin qu'elles lui deviennent familières (culture inca, histoire de l'aviation, etc.).	
	<b>35</b>	Références politiques, historiques et culturelles "pointues". Leur maîtrise est nécessaire à la compréhension globale du texte.	
<b>Degré d'abstraction</b>	<b>5</b>	Contexte concret relevant essentiellement de la vie quotidienne.	--
	<b>15</b>	Contexte concret sortant du strict quotidien et/ou introduction ponctuelle de l'expression de l'opinion, des sentiments. Articulation simple d'événements et/ou d'idées.	
	<b>30</b>	Passages récurrents, mais non systématiques, amenant sur le terrain de la réflexion, de l'argumentation. Présence récurrente, mais non systématique de second degré (humour, ironie).	
	<b>50</b>	Présence systématique d'abstraction (réflexions théoriques, philosophiques, etc), de second degré (humour, ironie). Articulation d'événements et/ou d'idées complexes.	

<b>Critères facultatifs</b>	<b>-10</b>	Ôter 10 points si le document possède un lexique, un glossaire, des notes de vocabulaire, et/ou des exercices de compréhension clairs conséquents et faciles à utiliser.	--
	<b>-10</b>	Ôter 10 points si le récit possède une intrigue captivante (romans policiers ou d'aventure) ou un sujet général susceptible d'intéresser une majorité d'utilisateurs (actualité, grand sujet de société).	--
	<b>-10</b>	Ôter 10 points s'il s'agit d'une oeuvre traduite et d'un auteur jouissant sur place d'une certaine notoriété.	--
	<b>-20</b>	Ôter 20 points si le document est accompagné d'un enregistrement sonore de bonne qualité.	--
<b>Total</b>			
		<b>Total</b>	--
<b>Moins de 80 points:</b>		<b>A1</b>	
<b>de 85 à 110 points :</b>		<b>A2</b>	
<b>de 115 à 160 points :</b>		<b>B1</b>	
<b>de 165 à 200 points :</b>		<b>B2</b>	

**Grille des critères de classement des documents Vidéo-DVD**

<b>Critères</b>	<b>Points</b>	<b>Définitions</b>	<b>Note</b>
<b>Sous-titrage</b>	<b>5</b>	sous-titres en espagnol	--
	<b>20</b>	sous-titres uniquement en français	
	<b>40</b>	aucun sous-titres	
<b>Durée du document</b>	<b>5</b>	moins de 30 min.	--
	<b>10</b>	entre 30 et 90 min	
	<b>20</b>	plus de 90 min.	
<b>Qualité sonore de l'édition</b>	<b>5</b>	écoute parfaite	--
	<b>10</b>	écoute moyenne	
	<b>20</b>	Son saturé	
<b>Registre de langue</b>	<b>10</b>	Français standard (type RFI), courant: les expressions imagées, familières ou techniques sont pratiquement absentes.	--
	<b>20</b>	Présence ponctuelle mais non systématique d'expressions familières, imagées, techniques ou d'un registre soutenu (tendance à un allongement des phrases), n'entravant pas cependant la compréhension.	
	<b>40</b>	Présence fréquente d'expressions familières, imagées, argotiques, techniques ou d'un registre soutenu.	
	<b>Eliminatoire</b>	L'ensemble des dialogues/commentaires est construit sur un registre familier, argotique, technique ou soutenu.	
<b>Rythme et prononciation</b>	<b>10</b>	Les acteurs ou les locuteurs s'expriment lentement et/ou avec une élocution particulièrement claire (c'est le cas de nombreux films documentaires). La voix est rarement couverte par d'autres sons (musique, scènes de rues, etc.)	--

	20	Les acteurs ou les locuteurs s'expriment de façon plus naturelle et spontanée, rendant la compréhension parfois moins claire. La compréhension peut être rendue difficile par l'environnement sonore.	
	40	Le débit vocal est rapide. Les paroles sont souvent difficilement compréhensibles, voir inaudibles du fait de l'environnement sonore, du volume de la voix, d'une mauvaise prononciation, ou d'un accent très prononcé.	
Références socioculturelles et culturelles			
<b>Références socioculturelles et culturelles</b>	5	Références communes aux deux pays	--
	10	Références à des aspects plus pointus, mais leur maîtrise n'est pas nécessaire à la compréhension.	
	30	Références culturelles difficilement repérables et peu connues. Leur maîtrise est importante voire nécessaire pour saisir l'intérêt du film.	
Rapport entre l'image et le discours			
<b>Rapport entre l'image et le discours</b>	5	Rapport direct entre l'image et le discours (cas de nombreux documentaires). Le film repose principalement sur l'action. L'image est le principal vecteur de sens.	--
	20	L'action n'est pas le vecteur principal de sens. Présence récurrente de scènes parlées (dialogues, monologues, commentaires en voix off) qui font avancer l'action ou l'information mais non accompagnées des images illustrant ce discours.	
	40	Le discours est pratiquement l'unique vecteur de sens. Le scénario est complexe et présente souvent des situations difficilement reconnaissables.	
<b>Critères facultatifs</b>	<b>-10</b>	Notoriété, succès, etc.	--
		<b>Total</b>	--
<b>Moins de 75 points :</b>		<b>A1</b>	
<b>de 75 à 90 points :</b>		<b>A2</b>	

<b>de 95 à 125 points :</b>		<b>B1</b>	
<b>de 130 à 170 points :</b>		<b>B2</b>	

*NB : Nous attirons votre attention sur le fait que nous avons décidé que les documents classés en A1 et en A2 devaient contenir des sous-titres en langue locale (i.e. ici en espagnol).*

<sup>1</sup> 「Bibliothèque de l'apprenant」については、横浜のアンステイチュ・フランセのパンフレットで「学習者の本棚」という訳語の使用が確認できたが、このプロジェクトの趣旨を考慮して本稿では、「学習支援ライブラリー」という日本語名称を統一して用いる。また、当プロジェクトの創設者は主に図書館を意味する「bibliothèque」という用語を論文の中で用いているが、メディアライブラリーで扱うような視聴覚資料も含まれるものである。

<sup>2</sup> ヨーロッパ言語共通参照枠 *Cadre Européen Commun de Références (pour les Langues)* のことであり、フランス語表記に基づく略語としては「CECR」が一般的である。英語では *Common European Framework of Reference for Languages* と表記されることから「CEFR」と略され、この略語の方を日本では目にすることが多い。しかしながら本稿では適宜示す引用文の原著がフランス語であり「CECR」と示されていることから、「CECR」を用いる。

<sup>3</sup> Nathalie Lelong et Alain Durand, 2005, *La Bibliothèque de l'apprenant, un outil d'accompagnement à l'apprentissage d'une langue étrangère*, p. 7, (<http://www.bibliotheque-apprenant.org>)

<sup>4</sup> アリانس・フランセーズの各機関はCECRの言語教育上の推進という点で決定的な役割を果たしており、各所で行われている講義は一般的にCECRの教育方針を重んじたものである。従って、二種類の教育方針を取り入れて並行的に実施している本学とは事情が異なる。

<sup>5</sup> 吉島茂・大橋理枝 他(訳編), 2004, 「外国語教育Ⅱ 外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠」, 朝日出版社

<sup>6</sup> 西山教行, 2010, 「序 複言語・複文化主義の受容と展望」, p. v, 細川英雄・西山教行, 2010, 『複言語・複文化主義とは何か—ヨーロッパの理念・状況から日本における受容・文脈化へ』, くろしお出版

<sup>7</sup> Nathalie Lelong et Alain Durand, 2005, p. 4

<sup>8</sup> *ibid.*, p. 4

<sup>9</sup> *ibid.*, p. 5

<sup>10</sup> *ibid.*, p. 5

<sup>11</sup> *ibid.*, p. 5. また、これは二つ目の資料リソースの種類を定義するために用いられた用語であり、ルロンとデュランは、論文の中で「実物の資料・レアリア」  
« document authentique »よりもこの「文化的資料」を選んだ理由を説明している。

<sup>12</sup> *ibid.*, p. 7

<sup>13</sup> *ibid.*, p. 7

<sup>14</sup> *ibid.*, p. 10

<sup>15</sup> *ibid.*, p. 11

<sup>16</sup> ルロンとデュランによる用語であるが、図書館やメディアライブラリーのことを指す。

<sup>17</sup> *ibid.*, p. 12

<sup>18</sup> *ibid.*, p. 13

<sup>19</sup> *ibid.*, p. 15

<sup>20</sup> *ibid.*, p. 17

<sup>21</sup> *ibid.*, p. 18

<sup>22</sup> フランス文化と学習者の文化を指す。

<sup>23</sup> 「スペイン語」とはあるが、学習者の母国語という解釈をすべきものであろう。

<sup>24</sup> Radio France Internationale のこと。

<sup>25</sup> フランスと学習者の居住国を指す。

<sup>26</sup> 実は「学習支援ライブラリー」の公式HP上でもA1レベルが難しすぎる場合、同様にA1の最高点を下げる事が可能であるとの提言がなされている。

<sup>27</sup> これは2012年度の場合であり、2013年度以降については必ずしも同様であるとは言えない。